

レジャー志向性尺度の開発に関する研究（2）

—多様な大学生における調査データから志向性尺度の今後を展望する—

○佐橋 由美（大阪樟蔭女子大学） 佐藤 馨（びわこ成蹊スポーツ大学）

Keywords: レジャー診断ツールの開発, 実践的適用, レジャー志向性とレジャースタイル, レジャーの質的充実, 全般的well-beingとの関連

目 的

団塊世代の大量退職の時期を迎えている今日、中高年層の第二の人生とりわけ、レジャーの面での充実に対する社会の関心は、より一層高まってきているように思われる。しかし、レジャー研究の成果は目下のところ、未だその社会的ニーズに十分応えうるところまで来ていないというのが実情である。個人のレジャー生活の充実を支援していくための第一歩は、現時点での各個人のレジャー生活の実情、およびレジャーに対する態度や動機づけなどを総合的に診断・評価することであり、その後、その個人をより良い方向へと導くべく、情報や助言、具体的支援策の提供がなされるというのが、効果的なプロセスといえるのではないだろうか。この成人へのレジャー教育ともいえるべく啓発のプロセスは、非常に重要であるにもかかわらず、実践的な面での具体的方法論に関しては、未だ第1のステップへの糸口すら見つけられない状況である。そこで、私達研究グループはそのような遠大な目標の下、成人のより良いレジャー生活に向けての診断、そして方向性の提示、助言などに利用しうる診断ツールを開発し、有用なツールを蓄積していくという意図をもって研究に着手した。

先の「レジャー志向性尺度の開発に関する研究」（佐橋・多留, 2006）では、レジャー生活の診断・評価にあたり、志向性という概念に着目し、この志向性からどれだけレジャー生活全般に関する有益な情報を引き出せるかを、試験的にレジャー志向性尺度を作成、女子大学生に実施して検討した。ここでは、レジャーにおける志向性は、「長期的展望-向上」「活動性」「主導性」「自然志向」「対人関係志向」の5側面から把握することができ、これらの下位概念のうちとりわけ「主導性」や「長期的展望-向上」「活動性」の得点が、様々なレジャー領域への参加度から見たレジャースタイルや、内発的動機づけレベル、退屈感や阻害レベルの低さなどと密接な関係があることが明らかになり、志向性がレジャー参加の量・質両面での有益な情報をもたらすことが実証された。しかし、この研究における知見は、あくまで女子大学生に限られたものであり、次なる段階では、大学生でも、より多様な学校種別の大学生について再度検討すべき必要があった。また、志向性の把握にあたって、より有効な下位概念があるかもしれない、追加の調査と分析が必要と考えられた。

本報告を含む一連の研究の長期目標は、できるかぎり広範な年齢層、ライフスタイルをもつ人々のレジャー生活を俯瞰しうるような有効なレジャー生活診断ツールを、とりわけ、志向性という観点から開発していくことであるが、ここでは先の調査研究を発展させて、専攻や共学/女子大等の学校種別の多様性に配慮した上で、大学生というコンビニエンスサンプルに対して尺度を実施して、尺度の構造、信頼性・妥当性などを検討し、診断ツール開発・蓄積に資する基礎資料を得ようとするものである。

方 法

対象： 人文系女子大学, 体育系単科大学, 医療系（看護）大学に通う男女大学生。

調査手続き： 各大学において、調査者が担当する授業時間に『余暇生活に関する調査』と題された調査票を配布・実施し、授業時間内に回収した。

有効回答： 志向性尺度を中心に、その他いくつかの尺度において回答に不備があったものを除外した

結果、分析に用いることができた有効票は女子大では161件、体育大173件、看護大80件であった。

質問紙の構成：①レジャースタイルを様々な活動領域における参加度（頻度）や時間使用の全体的パターンから明らかにするためのレジャー行動目録（Leisure Behavior Inventories）、②レジャー場面における各個人の内発的動機づけ傾向を測定するためのレジャー内発的動機づけ尺度（Weissinger & Bandalos, 1995）、③同じく個人差としてのレジャーにおける退屈感応性を見るための退屈感尺度（Iso-Ahola & Weissinger, 1990）、④レジャーにおける阻害要因の認知度（LDB Users Manual（Witt & Ellis, 1988））、⑤レジャー生活満足度、⑥全般的well-beingを測定するためのPILテスト（Purpose in Life Part-A）および充実感尺度（大野, 1984）等が、主たる調査内容であった。

レジャー志向性尺度：32項目からなり、各項目ともレジャー場面における考え方、行動傾向を表す内容的に相反する2つの文章「A○○・・・」「B○○・・・」が示されている。これらについて、自分の考えや行動に相当する程度を「A」「どちらかといえばA」「どちらかといえばB」「B」で回答する。

分析：志向性尺度の反応結果に対し因子分析等を行って、尺度の構造を今一度明らかにするとともに、志向性尺度の得点に基づいてクラスター分析を行うことによって、サンプル全体をレジャー志向性に関して何らかの特徴を示すいくつかのグループに分類することを試みる。このセグメンテーションにより、どのような志向上的特徴をもったグループが存在するのを探るとともに、各グループのレジャー参加度や質的な面での充実などの有益情報が引き出せるかどうか、検討を試みる。

結果と考察

1. レジャー志向性尺度の構造

志向性尺度の構造を確認するために、まず、3校による統合データを用いて基本統計量を算出、因子分析を行った（表1）。学校種別ごとの分析結果は紙幅の都合上掲載できないが、基本的には表1に示された6因子（視点）が安定的に確認されたといつてよいであろう。とはいえ、各因子への帰属・該当項目の数が多少異なったり、想定外因子への寄与や予期せぬ因子の結合といった現象が多少、見られた。

女子大学生における因子分析の結果は、3グループ中で最も全サンプル分析の結果と類似していた。すなわち、全サンプルによる分析結果は、女子大学生の特徴が最も色濃く反映されたものであるということがいえる。体育専攻学生では、表1で「活動性」因子に該当している8項目のうち、外出傾向などの“社会的行動面での活動性”を表す要素（4項目）が「対人関係志向」と結合している点と、それ以外の「活動性」4項目—身体面での活動性を意味する—がさらに2つに分離しているという点が特徴的であった。体育専攻生であるということが、身体的な活動性に関して、さらに細かい分類（日常レベルの身体活動性とより高レベルの身体活動性）を生じさせているところが非常に興味深い。看護大生の分析結果は、サンプルサイズがN=80と大きくないことが原因してか、あるいは専攻分野の特殊性によるものなのか、若干解釈の難しいところもあった。

表1の全体分析の結果を見ると、先の研究で抽出された5因子が本分析においても確認されたことから、「長期的展望・向上」「活動性」「対人関係志向」「主導性」「自然志向」の5因子の安定性が示されたといえるであろう。とともに、本調査から新しく追加した「利他主義」項目についても、これらが志向性概念を構成する第6の要素であることも確認できた。また、因子ごとの信頼性係数は、 $\alpha = .814 \sim .681$ であり、各下位尺度の内的一貫性は十分に高いと考えられる。

2. レジャー診断ツールとしての志向性尺度の有効性

各志向性下位尺度（表1を最終解とした）の得点をもとにクラスター分析を実施して、どのような特徴を示すグループが識別されるかを検討した。さらに、そのセグメンテーショングループごとに、レジ

表1 レジャー志向性尺度の基本統計量および因子分析の結果

NO	質問内容(一)		平均	SD	長期的 展望・向上	活動性	志向		利他主義	自然志向	クロンバ ツク α
	質問内容(一)	質問内容(十)					対人関係	主導性			
6	A	手軽で誰にでも楽しめる活動が好き	2.18	1.00	.643	.071	.056	.139	-.007	-.009	.814
* 14	B	自分のやり方で楽しめる	2.24	0.99	.625	.054	-.058	.043	.170	.000	
* 21	B	面倒なことは避けて楽しめる活動をする	2.44	1.00	.614	.008	.079	.078	.236	.015	
5	A	暇な時は遊びたい	1.81	0.98	.575	-.031	-.180	.028	.025	.015	
29	A	今楽しいことをするが私のポリシーだ	2.42	0.93	.561	.119	-.064	.005	.231	.062	
22	A	今はなくてはならないような趣味活動はしない	2.71	0.96	.526	.210	.040	.122	.189	.047	
* 13	B	今を楽しみたい	2.54	1.10	.516	.112	-.047	.030	.230	.053	
* 30	B	趣味なのだからどんなに悪いとしてもやめるものではない	2.59	1.02	.499	.186	.072	.160	-.039	-.092	
* 1	B	ゴロゴロしていたい	2.50	0.93	.318	.631	.143	.090	.031	.071	.800
* 25	B	休養する方がエネルギーの充電になる	2.28	1.03	.322	.537	.163	.157	-.025	.141	
* 18	B	家で雑誌やインターネットの趣味情報を集めているのが楽しい	2.77	0.93	.029	.530	.305	.219	.116	-.045	
* 28	B	外に出なくても身近で楽しめることはたくさんある	2.54	0.96	.024	.517	.209	.182	.156	-.210	
* 17	B	休養・リラクゼーションを優先させる	2.22	1.03	.387	.387	.117	.181	-.031	.156	
2	A	家にいたい	2.61	0.95	-.034	.458	.290	.025	.047	-.042	
* 10	B	出かけるよりはテレビやビデオを見る	2.54	1.03	.076	.446	.177	.132	.079	-.147	
9	A	テレビを見たり音楽を聴いたり静かにすごす	2.20	0.99	.362	.374	.093	.100	.057	.035	
* 12	B	一人で趣味に没頭	2.69	1.00	-.171	.209	.754	.139	.208	-.059	.786
20	A	一人で音楽を聴いたり本を読んだりする	2.60	1.01	.061	.203	.693	.152	.038	-.043	
4	A	一人で過ごしたい	2.73	0.95	-.008	.264	.684	-.029	.068	-.080	
* 28	B	私の趣味活動は一人でするものが多い	2.48	1.03	.012	.212	.485	.087	-.074	-.043	
31	A	何かを計画する時大体自分はサポート役だ	2.39	0.93	.091	.148	.083	.775	.093	-.012	.795
* 23	B	最初に何かを提案するのは自分だ	2.38	1.02	.204	.066	.111	.693	.109	-.123	
* 15	B	人から誘われるのを待っている方が好きだ	2.52	1.03	.137	.199	.048	.639	.135	-.009	
* 7	B	あまり自立しすぎたくない	2.38	0.89	.094	.289	.122	.500	.043	-.122	
32	A	まずは、自分のことが優先されると思う	2.19	0.78	.202	.097	.006	.056	.678	.104	.717
* 24	B	自由時間は自分のために使いたい	1.98	0.83	.134	.012	.112	.119	.614	.053	
16	A	ボランティア活動や地域活動などにはまず関わらない	2.63	0.99	.266	.107	.077	-.004	.534	.084	
* 8	B	自由時間は自分の楽しみや得楽のために使いたい	1.88	0.85	.084	.018	-.001	.120	.501	.000	
* 3	B	旅行する人があふれる場所を避ける	3.23	0.90	.038	-.050	.030	-.021	.032	.712	.681
* 27	B	繁華街など人の多いところに行きたい	2.91	0.94	.058	-.214	-.130	-.086	-.028	.617	
* 11	B	人の中に入ると落ち着く	3.27	0.85	.001	.023	-.022	-.083	.063	.595	
19	A	理髪問題や食の安全などには興味がない	2.92	0.90	.127	.130	-.106	.012	.171	.431	
二集和											
3.38 2.60 2.22 2.08 1.79 1.63											
寄与(%)											
10.6 8.1 6.9 6.5 5.6 5.1											
累積											
10.6 18.7 25.6 32.1 37.7 42.8											

※ 得点化は、通常の場合A→Bの順に1～4点を配点。項目番号に*が付されている場合はA→Bの順に4～1点を与えた。
 ※※ 因子分析は、主因子法による因子抽出の後、バリマックス回転を実行。

ャースタイル、レジャーにおける内発的動機づけ、退屈度、レジャー阻害などのレジャー関連変数ならびに生活全般にわたる well-being レベルの比較を試みた。レジャー関連変数や well-being 変数に関して、グループ間で何らかの差異が一貫した特徴的パターンで示されるのであれば、志向性尺度が各個人のレジャー生活を診断するツールとして、ある程度有効であるということが示唆されるものと思われる。

図1は、階層クラスター分析を行って、試みに4グループにセグメンテーションした場合の、各グループの志向性における特徴を表している。それぞれのグループに左から、「消極型」「発散型」「準適応—自己啓発型」「最適型」などと名づけることが可能かもしれない。「発散型」とは、活動的で人とのつきあいを好む向社会的な人であるが、短期的・今ここでの楽しみを迫及する傾向が強く、長期的展望に立って自分の将来のために努力するという発想に欠けている。これに対して、「準適応—自己啓発型」は、自分の将来を見据えて行動する人で向上心が強い。しかし、人とのつきあいが苦手な人でもある。

表2は、4つのセグメンテーショングループのレジャー生活の量・質両面での様相、生活全般の質を比較し、図式的に表現したものである。表2より、とりわけ「最適型」と「消極型」の間には、レジャー生活の様々な側面、ならびに生活全般の質的側面において顕著な差異が存在しており、レジャー志向

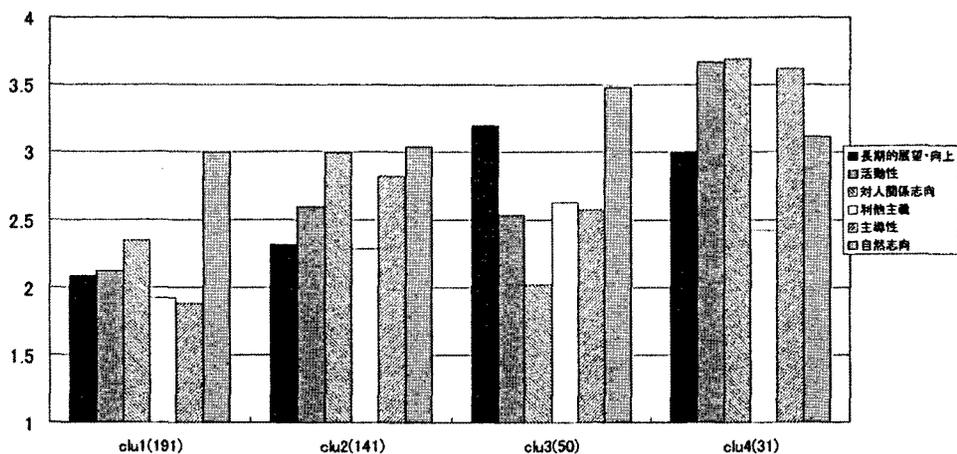


図1 各クラスターにおけるレジャー志向性のパターン

性には、レジャー生活の量と質、生活全般の質に関して、個々のサンプルを順序づけ、マッピングする機能があることが示された。そして、これら4タイプの存在は、充実したレジャー生活を構築していく際の、経時的な発達プロセスをも表しているように思われる。つまり、未発達な段階の「消極型」から、「発散型」あるいは「準適応型」を経て（これらのどちらに進むかは個人的特性の影響が大と考えられるが）、最終的に「最適型」に至るという向上プロセスを辿ると考えることができる。このレジャー発達モデルは、現在個人がどの発展レベルの途上にあるのかということ診断する際の枠組みとして利用できるものと思われる。

表2 レジャー関連変数およびwell-being変数のグループ間比較の概略

	clu1(191) 消極型	clu2(141) 発散型	clu3(50) 準適応型	clu4(31) 最適型
レジャースタイル				
運動・スポーツ	▲	△	○	◎
外出	▲	○	○	◎
社交	▲	○	○	◎
パフォーマンス	▲	△	○	△
教養・学習	○	○	◎	○
パソコン	○	○	○	◎
アウトドア	▲	△	△	◎
社会的活動	▲	△	△	○
活動領域全体	▲	○	○	◎
レジャー満足				
内発的動機づけ	▲	○	○	◎
退屈感(弱)	▲	○	○	◎
阻害認知(少)	▲	○	○	◎
生活全般				
生活充実感	▲	○	○	◎
生きがい感	▲	○	○	◎
自尊感情	▲	△	○	◎

◎ 高レベル ○ 中レベル △ 低レベル ▲ 著しく低レベル